

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20590524

研究課題名（和文） 多職種関与による適切な在宅緩和ケアシステムの開発

研究課題名（英文） Development of an effective home palliative care system by a multidisciplinary team approach

研究代表者

下妻 晃二郎（SHIMOZUMA KOJIRO）

立命館大学・生命科学部・教授

研究者番号：00248254

研究成果の概要（和文）：

オーストラリアで開発された遺族満足度調査票、FAMCARE Scaleの日本語版を完成した。訪問看護師を対象にした面接調査の質的分析により、在宅での看取りを阻害する6因子を抽出した。1) 死ぬ場所についての思い、2) がん終末期の症状コントロール不足、3) 医療者の治療観、4) 介護継続困難から来る施設死への流れ、5) 看取る家族の不在、6) 多職種の連携不足、であった。前研究班の成果と合わせ、適切なシステム開発に寄与する諸課題が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

First, we developed the formal Japanese version of the FAMCARE Scale to assess satisfaction of the bereaved family members. Second, we revealed the six factors which might hamper the completion of the patients' lives at home by qualitative analyses of the transcripts from interviews to the nurses: (1) thought about the place of death, (2) insufficiency of symptom control for end-stage cancer patients, (3) therapeutic views of healthcare professionals, (4) a stream of death at hospital which was led by the difficulty of continuing the care, (5) lack of family members who take care of the patients, (6) insufficient cooperation with healthcare professionals. The results of this study along with our previous study could clarify many problems possibly contribute to develop an effective home palliative care system by a multidisciplinary team approach.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,700,000	1,111,000	4,810,000

研究分野： 医療管理学

科研費の分科・細目： 境界医学・医療社会学

キーワード： 在宅医療、緩和ケア、癌、チーム医療

1. 研究開始当初の背景

適切な環境さえ整えば、終末期は慣れ親しんだ自宅で過ごしたいという人々が多い。しかしわが国においては、従来、在宅緩和ケアはなかなか普及してこなかった。

一方、岡山市においては、数年来、地域の

複数の医療福祉種が協力して関わる、比較的よく機能しているように見える多職種関与の在宅緩和システムの先駆的モデルがあった（緩和ケア岡山モデル：以下、岡山モデル）。

そこで、2006-2007年度の科学研究費補助金助成による研究班で、地域に密着した、一

般化可能性のある多職種関与の在宅緩和ケアシステムの開発を目的として、主に以下の2種類の研究を行った。

(1) 岡山モデルの促進あるいは阻害因子を明らかにするための、専門職を対象とした質的研究

促進因子としては、1)プライマリケア・チーム(プライマリケア医[GP]、訪問看護ステーション、訪問介護ステーション、薬局、後方病院、など)と、緩和ケア専門チーム(緩和ケア専門の技術を持った医師・看護師・医療ソーシャルワーカー、作業療法士、など)が参加する学習会の定期開催、2)両チームの十分な情報共有、3)プライマリケア・チームによる緩和ケアに特有なケアの理解、4)両チームの適切な役割分担、5)プライマリケア・チームの尊重、6)訪問看護ステーションの中心的役割の重視、7)緊急体制の構築、8)介護保険の活用、9)福祉職との連携、であった。

さらに、すでに備わっている、あるいは不足している人的医療資源や、役割と関連の概要が明らかになった。

(2) 在宅緩和ケアシステムのアウトカムとしての家族(遺族)満足度調査

家族(遺族)満足度調査のための適切な定量的尺度がわが国になかったため、オーストラリアの研究者が開発した FAMCARE Scale(20項目)の日本語版を開発者の許可を得て作成し、それをを用いて83人の遺族を対象に満足度調査を行った。

比較対照はないものの、満足度が平均よりも高い回答の項目が5割を超えた。

特に、1)痛みの緩和、2)質問への医療専門家からの回答、3)家族面談への医師の適切な応需、4)症状に対して医師が払う注意、5)主治医が患者のために取る時間、の評価が高かった。一方、入院用ベッドの常時確保、に課題を残した。

FAMCARE Scale日本語版のvalidation確認のために、因子分析も同時に行った。

2. 研究の目的

上記1.の(1)(2)の調査結果を元に、一般化可能性がさらに高いシステムを開発する目的として、今回の研究班では以下の研究を行った。

(1) FAMCARE Scale 日本語版の完成

(2) 在宅における看取りを阻害する因子の分析

3. 研究の方法

(1) FAMCARE Scale 日本語版の完成

開発における翻訳過程の詳細の確認と、前研究での使用実績とその分析から得られた、

実施可能性と妥当性について確認を行い、正式な日本語版を完成する。

(2) 在宅における看取りを阻害する因子の分析

面接調査の対象

終末期の在宅緩和ケアに関わり、看取りを経験している訪問看護師5名であった。調査期間は2010年8月~10月。

調査方法

まず半構造的な面接ガイドを作成し、それに沿って面接を行いデータを収集した。面接対象者からは録音に了承を得た後、面接を行った。

録音したデータを逐語録に起こし、それを熟読し、簡潔な文章に表現した。同じ意味内容のデータを集合させサブカテゴリーとし、抽出されたサブカテゴリーをさらに集合させカテゴリーとした。

分析過程では、研究指導者のスーパーバイズを受け、研究の信頼性と妥当性の確保に努めた。また倫理的配慮に関しては、研究協力者に研究について説明後、参加への拒否権やプライバシーの保護に関することを明言した上で研究協力の同意を得た。

4. 研究成果

(1) FAMCARE Scale 日本語版の完成

実施可能性が高かった。また、開発時に明らかにならなかった因子として、日本語版では、1)十分な情報量、2)医療者の態度、3)家族への教育サポート体制、4)緊急時の対応の4因子が同定され、ドメイン別の分析の可能性が示された。

(2) 在宅における看取りの阻害因子の分析
6カテゴリー、22サブカテゴリーが抽出された。

6カテゴリーは、1)死ぬ場所についての思い、2)がん終末期の症状コントロールの不足、3)医療者の治療観、4)介護継続困難から来る施設死への流れ、5)看取る家族の不在、6)多職種の連携不足、であった。

前研究班と本研究班の成果を統合すると、一般化可能性のある多職種関与の在宅緩和システムを構築するための課題として、下記の事柄が明らかになった。

1) 関わるすべての職種の情報の共有と連携の強化、役割分担の明確化

2) プライマリケア・チームの症状コントロール技術の向上と後方病院の確保、訪問看護ステーションの重視

3) 緩和ケア専門チームによるプライマリケア医の尊重

4) 患者家族あるいは行政の課題として、在

宅看取りを可能とする環境の整備、特に、世帯人数の減少の防止と、介護・福祉制度の積極的活用の促進

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 38 件)

Shiroiwa T, Fukuda T, Shimozuma K, Kuranami M, Ohashi Y, Watanabe T: Comparison of EQ-5D scores between anthracycline-containing regimens followed by taxane and taxane-only treatment regimens for node positive breast cancer patients after surgery: N-SAS BC 02 trial. Value in Health、査読有、(in press)

Ohsumi S, Shimozuma K, Ohashi Y, Shinji M, Hozumi Y, Mukai H, Takatsuka Y, Aihara T: Health-related quality of life and psychological distress of breast cancer patients after surgery during a phase III randomized trial comparing continuation of tamoxifen with switching to anastrozole after adjuvant tamoxifen for 1-4 years: N-SAS BC 03. Breast Cancer Res Treat、査読有、127(1)、2011、143-152

岩垣博巳、齋藤信也、加藤恒夫、田中紀章：レプチン・グレリン値からみたがん悪液質の病態 - メタボリック・シンドロームとはコインの裏表か？、緩和医療、査読無、18、2011、111-118

齋藤信也、原一平、山口龍彦、伊藤理砂、弘末美佐：地域緩和ケアシステムと診療所の役割、緩和医療、査読無、18、2011、017-130

赤瀬佳代、加藤恒夫、齋藤信也、荒尾晴恵、松岡順治、西本仁美、前川珠木、横山幸生、黒川純世、内藤さやか：大学病院腫瘍センターとプライマリケアチームの治療期から終末期にいたる継続的連携のあり方、緩和医療、査読無、18、2011、131-133

Taira N, Sawaki M, Takahashi M, Shimozuma K, Ohashi Y: Comprehensive geriatric assessment in elderly breast cancer patients. Breast Cancer、査読有、17(3)、2010、183-189

下妻晃二郎、白岩健：薬剤経済評価のための患者アウトカム評価。臨床薬理、査読無、41(6)、2010、275-280

下妻晃二郎：婦人科がん 臨床試験参加に必要な知識。8. がん臨床試験におけ

る QOL の評価。産科と婦人科、査読無、77(5)、2010、533-540

齋藤信也：医療現場で起きる「倫理」問題 - 看護師と他職種の立場を整理して看護教育、査読無、51、2010、274-278

Shimozuma K, Ohashi Y, Takeuchi A, Aranishi T, Morita S, Kuroi K, Ohsumi S, Makino H, Mukai H, Katsumata N, Sunada Y, Watanabe T, Hausheer FH: Feasibility and validity of the Patient Neurotoxicity Questionnaire during taxane chemotherapy in a phase III randomized trial in patients with breast cancer: N-SAS BC 02. Support Care Cancer、査読有、17(12)、2009、1483-1491

Shiroiwa T, Fukuda T, Shimozuma K, Ohashi Y, Tsutani K: Cost-Effectiveness Analysis of Capecitabine Compared with Bolus 5-Fluorouracil/l-Leucovorin for the Adjuvant Treatment of Colon Cancer in Japan. Pharmacoeconomics、査読有、27(7)、2009、597-608

Kuroi K, Shimozuma K, Ohashi Y, Hisamatsu K, Masuda N, Takeuchi A, Aranishi T, Morita S, Ohsumi S, Hausheer FH: Prospective assessment of chemotherapy-induced peripheral neuropathy due to weekly paclitaxel in patients with advanced or metastatic breast cancer (CSP-HOR 02 study) Support Care Cancer、査読有、17、2009、1071-1080

Ohsumi S, Shimozuma K, Morita S, Hara F, Takabatake D, Takashima S, Taira N, Aogi K, Takashima S: Factors associated with health-related quality-of-life in breast cancer survivors: Influence of the type of surgery. Jpn J Clin Oncol、査読有、39(8)、2009、491-496

Watanabe T, Sano M, Takashima S, Kitaya T, Tokuda Y, Yoshimoto M, Kohno N, Nakagami K, Iwata H, Shimozuma K, Sonoo H, Tsuda H, Sakamoto G, Ohashi Y: Oral uracil and tegafur compared with classic cyclophosphamide, methotrexate, fluorouracil as postoperative chemotherapy in patients with node-negative, high-risk breast cancer: National Surgical Adjuvant Study for Breast Cancer 01 Trial. J Clin Oncol、査読有、27(9)、2009、1368-1374

齋藤信也、加藤恒夫、山口三重子、下妻

- 晃二郎、菊井和子：在宅緩和ケアにおけるプライマリケアチームと緩和ケア専門チームの連携を促進する因子の検討 - 緩和ケア専門チームに対する調査から。緩和ケア、査読有、2009、19(6)、577-582
- 下妻晃二郎：がん在宅医療と緩和医療が在宅医療における多職種チームアプローチ 緩和医療学、査読無、11(3)、2009、195-200
- 下妻晃二郎：がん薬物療法学 基礎・臨床研究のアップデート VII 抗悪性腫瘍薬の臨床試験 - 行政との関わり 11. QOL 日本臨床、査読無、67(1)、2009、454-458
- 下妻晃二郎：患者の意向あるいは QOL 視点のアウトカムによる医療技術評価。医療情報学、査読有、29、2009、067-068
- 下妻晃二郎：がん在宅医療と緩和医療が在宅医療における多職種チームアプローチ 緩和医療学、査読無、11、2009、195-200
- 斎藤信也、宮脇聡子、奥村あすか、弘末美佐：在宅緩和ケアにおける保険外サービス供給の実態。訪問看護と介護、査読有、14、2009、1028-1032
- 21 斎藤信也：がん在宅医療専門家養成のための教育システム、緩和医療学、査読無、11、2009、244-251
- 22 Kuroi K, Shimozuma K, Ohashi Y, Takeuchi A, Aranishi T, Morita S, Ohsumi S, Watanabe T, Bain S, Hausheer FH: A questionnaire survey of physicians' perspectives regarding the assessment of chemotherapy-induced peripheral neuropathy in patients with breast cancer. Jpn J Clin Oncol、査読有、38(11)、2008、748-754
- 23 Shiroywa T, Fukuda T, Shimozuma K, Ohashi Y, Tsutani K: The model-based cost-effectiveness analysis of 1-year adjuvant trastuzumab treatment: based on 2-year follow-up HERA trial data. Breast Cancer Res Treat、査読有、109(3)、2008、559-566
- 24 下妻晃二郎、平成人：肝胆膵疾患と QOL 健康関連 QOL の尺度 癌特異的尺度 (QOL-ACD, EORTC QLQ, FACT) 肝胆膵、査読無、57(6)、2008、1129-1135
- 25 下妻晃二郎：V. QOL 3. The Functional Assessment of Cancer Therapy scale (FACT). 臨床と研究に役立つ緩和ケアのアセスメント・ツール 緩和ケア、査読無、18(Suppl)、2008、63-65
- 26 下妻晃二郎：緩和医療における精神症状への対策。緩和医療における QOL の評価と対応。緩和医療学、査読無、10(1)、2008、31-36
- 27 斎藤信也、大林雅之、山口三重子、他：在宅ケアにおける多職種間の情報共有とプライバシー。訪問看護と介護、査読有、13(6)、2008、470-475
- 28 渡邊美千代、斎藤信也、山口三重子、他：医療ニーズが低いことから退院を迫られた高齢者夫婦。訪問看護と介護、査読有、1(6)、2008、476-481
- 29 古川隆司、山口三重子、斎藤信也、他：デイケア利用者間のトラブルへの対応におけるディレンマ。訪問看護と介護、査読有、13(6)、2008、482-486
- 30 菊井和子、斎藤信也医療福祉現場で出会う倫理的ディレンマへの対処。訪問看護と介護、査読無、13(6)、2008、467-469
- 31 斎藤信也、大林雅之、山口三重子、菊井和子：在宅ケアにおける多職種間の情報共有とプライバシー。訪問看護と介護、査読無、13(6)、2008、470-47
- 32 斎藤信也：記述疫学的観点から見たわが国の乳がんの特徴。高知女子大学紀要、査読有、57、2008、27-35
- 33 斎藤信也、岩垣博巳、加藤恒夫、他：ブロッカーとNSAIDsによるがん悪液質改善効果。緩和医療、査読無、57、2008、27-35
- 34 斎藤信也、岩垣博巳、加藤恒夫、他：ブロッカーとNSAIDsによるがん悪液質改善効果。緩和医療、査読無、16(1)、2008、19-24
- 〔学会発表〕(計 39 件)
- Yagata H, Iwase T, Ohtsu H, Komoike Y, Saji S, Takei H, Nakamura T, Ohashi Y, Shimozuma K: Baseline assessment of patient-reported outcomes (PROs) for breast cancer patients after 5-years of endocrine treatment in randomized clinical trial: NSAS-BC 05., 12th International St. Gallen Breast Cancer Conference, March 16-19, 2011, St. Gallen (Switzerland)
- Fukuda T, Shiroywa T, Takeuchi T, Shimozuma K, Ohashi Y: Cost-effectiveness analysis of oxaliplatin in adjuvant therapy for stage3 adjuvant colon cancer patients in Japan., ISPOR 13th Annual European Congress, Nov 7, 2010, Prague (Czech Republic)
- Shimozuma K, Shiroywa T, Sagara Y, Tobata R, Ueo H, Kubota Y, Hori T, Amano K, Terada S, Mori M, Yajima T,

Kurahashi I, Saito S, Hosaka T: Effects and medical costs of a structured psychosocial group intervention for breast cancer patients after surgery., ISPOR 13th Annual European Congress, Nov. 7, 2010, Prague (Czech Republic)

Shimozuma K, Shiroiwa T, Fukuda T, et al: Comparison of EQ-5D score between treatment with 4 cycles of anthracycline followed by 4 cycles of taxane and 8 cycles of taxane for node positive breast cancer patients after surgery: N-SAS BC 02 trial. ISPOR 13th Annual European Congress, Nov. 7, 2010, Prague (Czech Republic)

Miyazaki K, Suzukamo Y, Shimozuma K, et al: Nationwide survey of awareness and understanding of quality of life in Japan: A comparison of surveys in 2004 and 2010., 17th ISOQOL Annual Meeting, Oct. 30, 2010, London (U.K.)

Shimozuma K, Satoh T, Kobayashi K, Hori T, Iida S, Sato A, Ishiguro H, Shiroiwa T, Saito S, Chow E: Development of the Japanese version of the HRQOL instrument for patients with bone metastases: EORTC QLQ-BM22., 17th ISOQOL Annual Meeting, Oct. 30, 2010, London (U.K.)

Shimozuma K, Fukuda T: Assessment of quality-of-life and health care economics in oncology. Educational lecture 8., 9th International Conference of The Asian Clinical Oncology Society, Aug.25-27, 2010, Gifu

齋藤信也, 加藤恒夫: 外来化学療法と在宅緩和ケア、第15回日本緩和医療学会学術大会、2010年6月18日、東京国際フォーラム(東京都)

齋藤信也: 一般診療所と在宅緩和医療、第12回日本在宅医学会大会、2010年2月27日、財団法人海外職業訓練協会(千葉県)

Ohsumi S, Shimozuma K, Ohashi Y, et al: Objective and subjective assessment of edema during adjuvant chemotherapy using taxane-containing regimens in a randomized controlled trial; National Surgical Adjuvant Study of Breast Cancer (NSAS-BC) 02. The 32nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium, Dec. 9-13, 2009, San Antonio (U.S.A)

Takei H, Ohsumi S, Shimozuma K, et al: Health-related quality of life and psychological distress in Japanese postmenopausal women with breast cancer treated with tamoxifen, exemestane or anastrozole for adjuvant endocrine therapy: a final analysis of National Surgical Adjuvant Study of Breast Cancer (N-SAS BC) 04., The 32nd Annual San Antonio Breast Cancer Symposium, Dec. 9-13, 2009, San Antonio (U.S.A)

横山幸生、齋藤信也、荒尾晴恵、加藤恒夫: 治療期から終末期にいたる腫瘍センターとプライマリケアチームの連携のあり方、第33回日本死の臨床研究会、2009年11月7日、名古屋国際会議場(愛知県)

齋藤信也、加藤恒夫: 外来化学療法と地域連携 - プライマリケアチームの関わりについて、第47回日本癌治療学会学術集会、2009年10月23日、パシフィコ横浜(神奈川県)

Yamaguchi M, Shimizu M, Saito S, Yokono M, Shimozuma K: How physician deal the ethical problems in Japanese centers for maternal, fetal, and neonatal medicine., American Society for Bioethics and Humanities 2009 Annual Meeting, Oct 15-18, 2009, Washington DC (U.S.A.)

齋藤信也: 地域緩和ケアのリソースとしての診療所の役割、第47回日本医療・病院管理学会学術総会、2009年10月17日、東京女子医科大学(東京都)

齋藤信也、宮脇聡子、奥村あすか、弘末美佐: 在宅緩和ケアにおけるいわゆる保険外サービスの実態と望ましいサービス供給のあり方、第17回日本ホスピス・在宅ケア研究会 in 高知、2009年7月11日、高知県立県民文化ホール(高知県)

齋藤信也、原一平、山口龍彦、他: 地域緩和ケアシステムと診療所の役割、第14回日本緩和医療学会学術大会、2009年6月19日、大阪国際会議場(大阪府)

加藤恒夫、齋藤信也、荒尾晴恵、横山幸生、他: 大学病院腫瘍センターとプライマリケアチームの治療期から終末期にいたる継続的連携のあり方、第14回日本緩和医療学会学術大会、2009年6月19日、大阪国際会議場(大阪府)

齋藤信也: コミュニティケアとしての緩和医療とチームアプローチ、第10回日本死の臨床研究会中国・四国支部研究会、2009年5月31日、山口県社会福祉会館(山口県)

- 渡邊久子、山口三重子、下妻晃二郎、齋藤信也、横山幸生、加藤恒夫：多職種連携による在宅緩和ケアの医療の質の評価 - 遺族調査から、第10回日本死の臨床研究会中国四国支部研究会、2009年5月31日、山口県社会福祉会館（山口県）
- 21 齋藤信也、下妻晃二郎、山口三重子、加藤恒夫、渡邊久子：在宅緩和ケア岡山モデルの遺族満足度調査によるアウトカム評価、第46回日本医療・病院管理学会学術総会、2008年11月15-16日、静岡県立大学（静岡県）
- 22 Saito S, Shimozuma K, Yamaguchi M: Development of an effective home palliative care system adopting a multidisciplinary team approach - Satisfaction of the patients' family for the domiciliary palliative care 'Okayama' model. ISPOR 11th Annual European Congress, Nov. 8-11, 2008, Greece (Athenes)
- 23 Shimozuma K, Yamaguchi T, Fujita K, et al: Response shift in a randomized controlled trial of low vision care for patients with age-related maculopathy. ISPOR 11th Annual European Congress, Nov. 8-11, 2008, Greece (Athenes)
- 24 齋藤信也、原一平、山口龍彦、他：在宅緩和ケアと診療連携、第46回日本癌治療学会総会、2008年10月31日、名古屋国際会議場（愛知県）
- 25 Saito S, Shimozuma K, Fukuda T, et al Basic attitude of physicians involved in breast cancer treatment towards use of generic anti-cancer drugs in Japan. ISPOR 3rd Asia Pacific Conference, Sep. 7-9, 2008, Seoul (South Korea)
- 26 下妻晃二郎、山口三重子、齋藤信也、他：在宅緩和ケアにおけるチーム医療の質の評価 - FAMCARE scale を用いた遺族満足度調査、第13回日本緩和医療学会学術総会、2008年7月4日、静岡県コンベンションアーツセンター（静岡県）
- 27 齋藤信也、加藤恒夫、伴信太郎、他：緩和医療カリキュラムの作成とその発展、第13回日本緩和医療学会学術総会、2008年7月4日、静岡県コンベンションアーツセンター（静岡県）

〔図書〕(計9件)

下妻晃二郎（日本病院管理学会 学術情報委員会 編）市ヶ谷出版社、医療・病院管理用語事典(新版).QALY、2011、21
平成人、下妻晃二郎、医薬ジャーナル社、

インフォームドコンセントのための図説シリーズ 乳房温存療法改訂版 乳がん低侵襲医療の新しい動き . 11 . 術後の身体的・精神的ケア、2010、64-69
山口三重子（深井喜代子 編）へるす出版（東京）、ケア技術のエビデンス 重症障害新生児の治療選択におけるエビデンス、2010、424-452
山口三重子（新見明子、塚原貴子、編）ふくろ出版（岡山）、看護教育制度の変遷 看護専門職の法的制度、2010、11-15
齋藤信也、ヌーヴェルヒロカワ、慢性期看護論第2版、2009、469
齋藤信也、濱崎啓介、田中紀章、メディカ出版、消化器外科ナースの1day テーマ速習プログラム、2009、175

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）
取得状況（計0件）

6 . 研究組織

(1)研究代表者

下妻 晃二郎（SHIMOZUMA KOJIRO）
立命館大学・生命科学部・教授
研究者番号：00248254

(2)研究分担者

山口 三重子（YAMAGUCHI MIEKO）
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：90279018

齋藤 信也（SAITO SHINYA）

岡山大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：10335599

(3)研究協力者

加藤 恒夫（KATO TSUNEO）
かとう内科並木通り診療所 院長

横山 幸生（YOKOYAMA SACHIO）
かとう内科並木通り診療所 医療ソーシャルワーカー（ケアマネジャー）